

症例2 無視と嫌味

- B氏 82 才. 女性
- 特記すべき既往症はなし

主症状

症状[1]群 数年前から物忘れが目立つようになる。

食事したことを忘れる。

半年前、眠れないので近くの病院を受診したところ、アルツハイマー病と診断される。

症状[2]群 興奮しやすく、家族に攻撃的になることがある。

精神安定剤と睡眠薬を常用するようになっている。

突然裸足で外へ飛び出し、交番に飛び込んで、「追われている。殺される」と警察官に訴えた。

迎えに来た家族と一緒に帰宅することを拒否。

生活歴

Bは教員。夫は40年前に亡くなった。苦労して育てた一人息子は、結婚して孫が生まれた後に亡くなった。事情があつて、孫はBが引き取って育てた。成長した孫の結婚後、一人暮らしとなつた。

年齢のため身体が弱くなってきたので、Bは6年前に孫夫婦と一緒に暮らすようになった。孫も孫の嫁も高校の教員。4歳と1歳の子供(Bにとってはひ孫)がいる。孫夫婦は真面目で教育熱心。

Bも元教師なので、子供の育て方に関しては長年の経験もあり、意見もあつた。時には孫たちとひ孫の育て方について、意見の対立があつた。しかし、結局は孫夫婦の主張する通りになつた。

年老いたBは、日常生活でも物忘れて時々ミスが出るようになった。家の中での彼女の『存在価値』は次第に小さくなり、発言権もなくなつていった。Bは、現在の自分の境遇を考え、また将来のことを思うと、胸が苦しくなる日々が続いた。しかし、そんなことにはお構いなく、孫の嫁の口から出る言葉は、Bについての愚痴から、次第にBへの『注意・叱責・嫌味・愚痴・無視など』へと変わっていった。孫も嫁からの報告を受けて、一緒になってBに注意した。

ある日、孫の嫁は言った。「おばあちゃんの育てた子は良くないと言います。私の子供は私が教育し、私が育てます。おばあちゃんは子供に近づかないで下さい」。その後ひ孫はBに近づかなくなつた。

家に居るのが楽しくなくなったBは、運動のため外出が多くなつた。そのようなとき、うっかり近所の人に「孫の嫁がきつくてねえ…。私は運が悪いんですね」と言ったことがあつた。その言葉が孫の嫁の耳に入つたため、孫夫婦とトラブルが発生した。孫の嫁はBと一緒に生活したくないと言った。以来2人は話をしなくなつた。

その後、Bの認知症が進行し始めた。Bは、孫夫婦から無視され続け、嫌味を言い続けられた。Bは、孫夫婦が留守のときでも、何かに恐怖を感じ続けるようになった。Bは、どこへ外出しても、無視と嫌味の恐ろしさから逃げ切れないような気分でいた。やがて、Bは孫夫婦が自分に対して殺意を持っていると感じるようになった。Bは、ついに悲鳴をあげて、警察へ逃げ込んだ。

Bの認知症はかなり進行していた。

【経過-1】

入院後のBへの対応は、スタッフがBの孫や子として、また、優しい嫁やひ孫としての役割を担当して、家族的付き合いを試みた。Bの存在価値を自覚させるための、病院での家族関係と実際の家庭関係をダブらせた(ままでとのよな)生活であった。

経過は良好で、しばらくしてかなり元気になり、「ひ孫がそばに来てくれなくて淋しい。退院して家に帰っても、何も楽しいことはないのです」と言うまでになった。この時点で孫夫婦に、Bに対しての考え方・対応の仕方を説明したところ、快く理解し、協力してくれた。

Bは驚くほどの回復を示した。Bはめでたく退院となった。

【経過-2】

家族に代わって病院のスタッフが、優しく接するだけでも、Bは安心し、心に余裕を持てるようになった。Bは、仲違ひをしていた家族を許せる心の余裕を持てるようになった。

退院したBは、1年後再び入院した。そして、改善して退院した。

更に、その1年後に3度目の入院となったときには、立って歩けないほどの衰弱状態であった。認知症も驚くほど進行していた。やはり、Bと孫夫婦は身内なので、我慢の限界はすぐにきてしまうようである。Bは無視と嫌味のなかでの生活を続けていたようであった。

Bの目つきは鋭くとげとげしくなっていた。それでもしばらくして、元の穏やかな笑顔が見られるようになった。

しかし、目から鋭さが消えていくのと同時に、いつも我々の手にしがみつくように強く握っていたBの手からも、力が抜けていった。Bは亡くなった。

【メモ】

Bが、最後まで持ち続けた能力は、他人からの『優しさ』を理解する能力であった。その能力はBを幾度となく改善させ、退院可能なレベルへと引き戻してくれた。Bは、最後まで人からの『優しさ』を握りしめることができたのである。

【まとめ】

高齢者への注意・命令・叱責・嫌味・無視などは、認知症を誘発し、進行させる。

逆に高齢者が持つ『優しさ』を理解する能力は、認知症の進行を抑制する。進行を止める。改善する。